

第28回 写真『ひとつぼ展』 公開二次審査会 REPORT



8人が得票する横一線の戦いを制したのは 存在感のある写真と本人のキャラクター

グランプリ受賞 原 大門

- 日時 2007年2月21日(金) 18:00~20:30
- 会場 リクルートGINZA7ビル セミナールーム
- 審査員
鈴木理策(写真家)
楢橋朝子(写真家)
平木収(写真評論家)
藤本やすし(アートディレクター)
大迫修三(クリエイションギャラリーG8)
(50音順・敬称略)
- 出品者
浅田政志 浅田友紀 浅原明広 浦田貴子 金川晋吾
金田なお子 榊智朗 林孝輔 原大門 福添智子
(50音順・敬称略)
- 会期 2007年2月19日(月)~3月8日(木)



見事にバラエティーに富んだ10作品

「これだけ作品がバラエティーに富んでいると審査結果はどうなるんだろうね」と展示会場で10名の作品をチェックした後は大迫さんがポツリと申す。各審査員の展示チェックが終わり、出品者10名とともに審査会場へ入場。第28回写真『ひとつぼ展』の公開二次審査会が間もなくはじまろうとしている。グランプリ受賞者には1年後、ガーディアン・ガーデンにて展覧開催の権利が与えられる。出品者一人ひとりによる熱のこもったプレゼンテーションがはじまった。概略は以下の通り。

林

祖父母が生まれ育った樺太、現在のサハリンを祖父といっしょに訪ねたときに撮った写真。そこで同じ景色を見ていたはずの祖父の眼差しは、僕とはまったく異なっていた。「人は同じものを見ても、同じ視点で見ない」と気付いた。僕の作品も見るとそれぞれの視点で見てくれればよい。



浅原

僕の写真は取材を基にしている。取材や旅に出ることで写真を撮るモチベーションが高まる。今回は、岩手県の三陸にある気球観測所を取材した。対象は気球を打ち上げる若手の物理学者たち。淡々とミッションをこなす姿を写した中に、独特の雰囲気や緊張感を感じてもらえればと思う。

榊

今回展示した作品は、すべて1年以内に東京で撮った写真。「現実とは何か」を、写真を撮ることによって明らかにしたいと思った。社会の現実を、生活する・移動する毎日の過程で撮り続けてきた。個展プランは、今日から1年間かけて旅をし、新たに撮りためた写真で構成したい。



原

「とある男がいました。オレは世界一のサーファーだったんだ、という父の遺した言葉をたよりに海をめざす。しかし、海へ行くはずがいつしか山へと入っていくのであった」というストーリーを思い付いてしまったので写真作品にすることにした。これはすべて自分が出演したセルフポートレート。

浅田友紀

小さい頃から雪が好きだったので、雪景色の写真を撮りたいと思った。降る雪をじっと見ていたら、雪に目のピントが合ってしまい、等速に落ちる雪とまわりの世界とが、それぞれ動いて離れていくような気がした。そこで、カメラのピントを雪にあわせて撮ってみようと思った。



金田

夜道を歩いているとき、キラキラと光るものを見つけた。雨で濡れた道に雨が落ちて光が躍っている瞬間。私はその光景にとりつかれ、シャッターを切った。写真の黒い画面の中に雨が降る、街灯が照らすことで新しい世界が生まれていると感じる。そこにたくさんの惑星を見た。

福添

つい見てしまった光景や、ふと出会った光景を撮り重ねている。私にとってのカメラは、見えないものを見せてくれ、伝えられないものを伝えてくれる道具である。「目カメラ」というタイトルには、見たままのイメージを逃がさず写真に撮れますようにという願いを込めた。



浅田政志

家族写真を撮り始めて7年になる。自分だけが東京に出てきているので、写真を撮るチャンスはお正月、お盆、GWに限られる。自分でシチュエーションを考え、家族皆で衣裳や小物を揃え、場所を決めて三脚を立ててセルフタイマーで撮影する。写真の力を借りて家族の絆が深まった。

浦田

誰もが簡単に目にすることができる工事現場の日常を撮った写真。吊り下げられる資材に目を向けてみた。青空の中で吊られる資材がまるでおもちゃのように見えてきた。浮遊感を表現したくて、資材とまわりの空間だけを切り取った。普段の生活の中でも不思議な世界は見えてくる。



金川

「説明がつきにくいもの」「得体の知れないもの」にこだわって写真を撮っている。写真は目の前の世界を切断することで、説明や意味を薄めている。今回の作品で2枚の異なる写真を並べたのは、特定しがたい何かを提示することで言葉では説明できないものを見てほしいと思ったから。

出品者10人のプレゼンテーションが終わり、各審査員が全体的な感想を述べた。まずは進行役の大迫さんが「今回は十人十色でそれぞれの方向性が違っていて、作品としてもかなり面白い出来になっている。誰かがグランプリでもおかしくないと思う」と先陣を切ると、平木さんは「長年審査をやっているが、今回は出品者がしっかり自作を自分の言葉で語ったプレゼンテーションはなかったように思う。あまりの充実ぶりに熱いものを感じた」と感無量の様子。藤本さんは「レベルは高いと感じた。個人的にピンとくるものがあったので議論していきたい」ともう選ぶ人を決めているよう。楢橋さんは「初めて審査員なので選ぶのは難しい。出品者みんなの話ぶりはもうグランプリを獲ったかのようなようだった」と少々とまどい気味。鈴木さんは「自分が何をやっているかということを見ている人が多い。写真の中でそれがどんな意味があるかを消化できている作品は見応えがあった。誰かがグランプリになっても、また落ちても気にしないように」と作品の完成度の高さや横一線の争いを強調する。

「一見、色物として見られがちだが、しっかり勉強した写真」

全体評に続いて出品者一人ひとりに対しての意見交換が行われた。

まず、林さんの作品について。平木さんが「写真のもつ可能性を引き出すために真摯に取り組んでいる。この手法は我々の年代にとっては、しっくりくる表現」と好印象を語ると、楢橋さんも「展示会場では地味な写真だが、じっくり見ると丁寧だし印象もいい。プレゼンテーションもよかった」と同意見。藤本さんは「プレゼンテーションで写真のイメージがふくらんだ。話を聞いてよかった」と写真撮影の背景に納得。

次に浅原さんの作品について。「若手技術者の仕事場というドライな世界をわざわざ選んで作品にしたことが大胆なチャレンジ」とその姿勢を評価する平木さん。大迫さんも「見たことのない風景を探し出してくる取材力には感心する」とフットワークのよさを褒める。藤本さんは「新しい写真、勉強になった」と笑う。「これはこれで面白い写真だが、6×6など別のカメラで撮るという手もある」とは鈴木さん。

榊さんの作品について。「このシリアスな写真はどこからくるのかと思ったが……背景を聞いて説得力があった」と平木さんが評価すると、鈴木さんは「嘘がない写真。ノスタルジックな印象もあるが、合格点狙いでないストレートな表現」と撮影姿勢を評価。楢橋さんが「純粋に応援したくなるようなものを持っていて」と人柄を褒めれば、藤本さんが「写真のざらつき感が印象的」とテキストに触れる。

原さんの作品について。平木さんが開口一番「写真というカテゴリーに留めておくのがもったいない」とテーマのユニークさに触れ、藤本さんは「山でサーフィンという画は、僕には自然だった。スケールの大きな写真」と好印象。「現時点でのイチ推し」とは楢橋さん。大迫さんは「一見、色物として見られがちだが、しっかりした写真の表現。いろんな展開ができる」と続編にも期待。

浅田友紀さんの作品について。「降る雪にピンと目を合わせようという感性が素晴らしい」と平木さんが言えば、鈴木さんも「面白い表現。写真を撮るときの風景の捉え方が新鮮だった」と同調する。

「作品のスケールの大きさを推したい」

ここで出品者全員に対しての意見交換が終わり、各審査員がグランプリ候補者を3名ずつ推薦した。結果は以下の通り。

鈴木/浅田友紀 金田 浦田
楢橋/原 金田 福添
平木/林 榊 浅田政志
藤本/原 福添 浦田
大迫/原 浅田友紀 浅田政志

これを集計すると、
原/3票 浅田友紀/2票 金田/2票 福添/2票 浅田政志/2票 浦田/2票 林/1票 榊/1票

8人が得票したが、1票ずつの林さん、榊さんが外れることになり、この2人に投票していた平木さんが他の6人の得票者へ票を投じることに。ここで平木さんは浅田友紀さん、金田さんに改めて投票。

再投票結果
原/3票 浅田友紀/3票 金田/3票 福添/2票 浅田政志/2票 浦田/2票

原さん、浅田友紀さん、金田さんが3票ずつで並んだ。「ではこの3名で決着をつけたいと思います」と進行の大迫さんが呼びかけ、審査はいよいよクライマックスへ……と向かい一番に「投票してはいないが、ここで浅田政志さんや福添さんを落とすのはどうか。もう一度議論しませんか」と提案。鈴木さんが「誰か一番に推せば方向性がでるのでは」と打開策を言うも、他の審査員から明快な意見がない。そこで大迫さんが「誰か意見が変わったか、強く推したいという人はいませんか」と窺う。すかさず藤本さんが「作品本位で考えると、そのスケールの大きさを推したい」と意思表明。しかし鈴木さんは「誰か一人を推すのは難しい。あえて言えば見てみたいのは、浅田友紀さん、金田さん」と2名をあげる。楢橋さんも「原さん、福添さんを見てみたい」と別の2名をあげると、平木さんも「浅田友紀さん、金田さんのどちらかに個展をやってもらいたい」と、やはり1名に絞りきれずに混戦模様。大迫さんは「あえて一人を推すとしたら、原さん」と腹を決める。ここで、2名を挙げている鈴木さん、平木さん、楢橋さんが強く推したい人を絞ることに。鈴木さんは「金田さん」、平木さんは「浅田友紀さん」、楢橋さんは「原さん」と、ここでそれぞれ意見が分かれた。「通常の写真展で出ている写真は予想がつく。表現に発見がある作品を選びたいと思う。この場で言うなら、雨とか雪を撮った作品」と鈴木さんが自身の選考観を述べる。しかし、意見はまとまらず、ついに大迫さんが「原さん、浅田友紀さん、金田さんの3名の中から各審査員が1票ずつと投票してグランプリを決めよう」と挙手による多数決を提案。

さて、最終多数決の結果は……
原/3票 浅田友紀/1票 金田/1票

「決定しました。グランプリは3対1で1対1で原大門さんと大迫さんが高らかに宣言。超満員の会場がドッと揺られ、拍手と笑いがか起こった。見事、横一線の混戦を制した原さんが立ち上がり「お集まりの皆さん、僕ですいません」さらに笑いが大きくなる。「1年度の個展は真面目に頑張る。皆さんの驚いた顔が見たいです」と締めくくり、公開二次審査会が終了した。

「実は一次審査で落ちるだろうと思っていた」

自然した審査会場から場所をパーティー会場に移して、出品者に直には、最後までグランプリを争った浅田友紀さんは「この作品を撮る直前には写真を止めようと思っていた。私の写真について皆さんがいろいろ言うのでくさって、写真を撮らなければ一人ではないと思えてよかった」と深くくむ。3人のうちの原さん、金田さんも「やりたかったことは出来た。私が伝えたいことが伝わって、うれしかった。また挑戦します」と笑顔。林さんは「プレゼンテーションを評価してもらったけど、写真自体の力で勝負したいです。やりたかったのはまわりレベルが高かったですね。また3回目に出展したい」とささばる表現。榊さんは「プレゼンテーションは緊張しました。撮る量だけは負けていません」と悔しさをかき殺す。福添さんは「票が入ってうれしかったです。横一線になってドキドキしました。今日は心地よく疲れたのでよく眠れそうです」と安堵の表情。浅田政志さんは「ブ

レゼンテーションは上がってしまいました。できることは100%やりました。見る人がポジティブになる写真撮ってほしいです」と気持ちは次に向かっている。浦田さんは「写真を撮る。作品に入り込みすぎたのが失敗ですね。展示は一部引いて見ればよかったです。この場に立たせたことがうれし」と悔しさの中にも充実感が見える。金川さんは「展示方法が難しいですね。作品については満足なのですが……」と納得できない様子。そして、グランプリに輝いた原さんに聞いた。「本当にうれしいです。でも、僕でいいのかな。実は一次審査で落ちるだろうと思っていたので、まさかグランプリになれるとは想定外ですね。最後の3人になって、この状況だと誰に決まってもいいと思っちゃいました。これで冒険の期間があと一年延びました。この道をまた楽しく進みたいですよ」と本人のキャラクターは、どこまでも明るい。

(文中一部敬称略 取材・文/田尻英二)